

2Sa-4 男女平等教育の視点から考察した戦後家庭科教育実践の教授学的研究
(第2報)

○鳥取大 田結庄順子 福岡教育大 柳昌子 宮城教育大 中屋紀子
静岡大 吉原崇恵 お茶女大 牧野カツコ 鳥取大卒業 西丸理恵

<目的>本報は、第1報に続き、戦後の家庭科教育の授業実践が依拠した教科理論や子どもにつけようとした学力、それを保障する具体的な教材、その授業の方法など、教授学の立場から、男女平等教育の視点で、戦後の家庭科の授業を分析し、授業実践の諸問題を考察するものである。第2報では、特に、学習者(子ども)の変容に焦点を合わせて、その実態について考察する。

<方法>1946年度から93年度までの47年間に公刊された月刊雑誌等に収録された家庭科の授業記録を教授学でいう「授業を構成する4つのレベル(教育内容、教材、教授行為、学習者)」に対応して抽出、分析した。抽出された授業記録は小、中、高校合わせて4,164事例であった。

<結果>記録で授業後の子どもの変容が客観化されているかどうかを分析したところ、全体の18.6%が「客観的な評価基準を明確にしていた」が「子どもの変容の記述のなし」も24.6%あった。しかし、「記述なし」は年代を経るに従い、減少していた。「感想文」は30.3%、「情緒的な記述」は26.3%で、この2つは年代を経るに従い、増加しており、評価のあり方が改めて問題となる。